

阿蘇植物概観

田代善太郎

1. 外輪山の山林を構成する木本—西側即ち熊本方面の山腹下部は常緑潤葉樹多くシヒ類、カシ類、アラカシ、アカガシ、ウラジロガシ、イチキガシ、シラカシ、イヌガシ、タブノキ、カゴノキ、シロダモ、ヤブツバキ、サザンクワ、サカキ、ヒサカキ、ネズミモチ、イヌツゲ、シキミ、クロキ、サンゴジユ等を主としハマクサギ、ネヂキ、シラキ、カラスザンシヨウ等を混じ下木にはアヲキ、ハクサンボク、ナハシログミ等の灌木あり、上部にはヤマザクラ、ウハミツザクラ類、シデ類、カヘダ類、ヤマボウシ、カナクキノキ、ケヤキ、アサガラ、アハブキ、ツリバナ、コナラ、ミヅナラ等あり、溪谷にはカツラ、フサザクラあり、頂上に近くブナノキありモミ、トガ、カヤ及び多少の緑常潤葉樹を混ぜ、下木にはアブラチヤン、シロモジ、クロモジ、ダンコウバイ、ムシカリ、ミヤマシグレ、サハフタギ、ハヒノキ、ゴマキ、原野に近くノリウツギあり。

2. 火口源の植物—千町無田及び成川無田の特色ある植物と其の地理的分布

千町無田次第に乾燥するを以てス、キ、其他の乾生草本、木本と共に侵入し湿生植物の範囲せばめらる、なおヨシ、ス、キ、ヌマガヤ、シユンジュユガヤ等の中にツクシフウロ、ヒゴシヨン、ミコシギク、ホソバリンダウ、ノハナシヨウブ等の分布上注意すべき植物を産す、千町無田と併せ称せられたる成川無田には、なお荒地ありホソバリンダウ多く其一部にはサクラサウあり。

阿蘇植物

3. 中央火山群の植物

○噴火口附近植物

○登山道附近の植物 阿蘇登山道路中最も短距離にして火口を見るに便宜多きは坊中よりの道なりされど植物観察の上よりは最単純なり、暫くに杉造林中を通りてのちは、ススキ、トダシバ、等の生ずる野をのぼる、草はすべて短し其間に見ゆる木本はニシキウツギ、コウツギ、オホヤマシモツケ、アキグミ、ヤマヤナギ、ハギ、ニガイチゴ、ノヤナギ、サルトリイバラ等にして千メートル前後よりミヤマキリシマ多し普通草本の中にイタドリ、ロクオンサウ、ヒロハノヤマヨモギ、アソノコギリサウ、ツクシアザミ、ツクシタマバウキ、(九百メートル離れた溪谷あり)マヒヅルサウ、キリシマガリヤス、カリヤスモドキ、シヨウジ

ヨウスグ。

阿蘇植物の概観と中央火山群並に外輪山のフロラと其四囲との関係

阿蘇山のフロラにつきて概観すれば中央大山群は多く、原野を以て蔽はれ溪谷に僅少の山林を有するのみにて其種類も単純なれど分布上注意すべき種類は原野にあり、火口原は阿蘇谷に広く南郷谷に狭くしかも後者は早く耕地と化したるを以て其中にありし特殊の植物に就きては知るに由なし、前者は明治の末期まで成川無田及千町無田に荒地を存じたれど種々の沼沢植物に富め事実を知るを得たり、今や排水につづくに開墾を以てし頗る旧観を失ひ僅に痕跡を留むるに至り之を将来に保存するは難事なるべし、火口原の内外両側即ち中央火山群の山麓と外輪山火口壁とは外輪山をへて侵入せる多少の山林を有するも其種類はなお単純なるを免れず、たゞ立野火口類の辺には頗る林相の発達を見る。

外輪山の大部分はススキ、ハギの等、中に種々の雑木を生ずる原野なれど其間に種々の分布上注意すべき種類を包蔵す、裾野の下部の溪谷にはそれぞれ山林あり、西地部及西南部には特に上方にまで発達せる山林を有す前者は鞍岳の溪谷たる深葉、矢護の山林にして植物の種類に富み又良材を産するを以て名あり、次第に伐採せらるも早く調査せるものあり之を知るを得たり範囲は広し。

阿蘇山羣のフロラを構成する分子の由来につきて者ふれど地部及東部は久住山羣に接触し、同系火山にて之に生ずる植物、其生態をふするより全範囲に亘り頗る其影響を受く、西北の鞍岳の溪谷は筑豊の山地に接触して其影響を受け南部は祖母山羣より西走する九州南部山脈に接して其影響を受く各方面のフロラを細かに調べて其四囲と共に研究するは頗る興味深きことなり。

就中外輪山並に中央火山群に於ける原野若く、沼沢地に生じて久住山羣に由来すると考ふべき分布上注意すべき植物と山林植物の若干につきて考察せん。

第一に阿蘇特産というべきもの有りやというに一も之なくたゞ九州にては唯一の産地なりと云うべく我国植物分布上に注意すべきもの前記千町無田火口原に生ずるミコシギク、ホソバリンダウ、過去にありたるミヅガシハ、外輪山地部の裾野に生ずるヲグラセンノウ中央火山群中の千里浜、成川無田火口原等に産するヒ

ラキを挙ぐべきも、ヒラキは西部外輪山の山麓熊本地方の白山河畔に生ずると共に豊後竹田よりも下流久住野とも見るべき所にも分布するを知る其他にも之なきを保せず前の三者につきて今日之を産せずとも過去はいかゞなりしか、其他の分布上注意すべき植物は久住山彙、由布山彙、と共に広く産するか或は久住山彙に接近する部分に之を有するを常とするを見れどすべて久住山彙に由来せりと考ふるを穩當なりとす。

中央火山群の中部山腹にあるツクシタマバウキは久住山地彙の千町無田にあり、同所に産するヒゴシヨンは久住山彙と由布山彙とを連続する山地にあり、又同所に産するリウキンクワとサクラサウ（外輪山地部に多し）とは久住山彙の山麓に多し然中ヒゴシヨンは満鮮系の植物にして其他も類縁の近きものか若しくは同系由来と見るべきものなり。

全山に広く散布するアソノコギリサウ、ヒロハヤマヨモギ、マツムシサウ、トモエサウ、イタチサ、ゲ、クサフヂ、ツルフヂバカマ、オホバクサフヂ、ノハナシヨウブと外輪山全部に亘りて生ずる、イチゲキスミレ、ツシマ、コナ、マ、コナー種、コウリンクワは久住山彙を中心として東は由布山彙其他に西は阿蘇山に九州中部火山地帯を連ねて分布する所にしてイチゲキスミレは明かに満鮮系の植物なり、高地主として中央火山群に産して九州特産とすべきミヤマキリシマ、ツクシヒゴタイ、ツクシアザミ、ツクシゼリ、キリシマガリヤス等を共有するはいうまでもなし。

外輪の北部より東部にあたりて生ずる、ハナシノブ、ルリヒゴタイ、カラマツサウ、ヒメトラノヲ種、キリンサウ、タチフウロ、シヨン、ヤツシロサウは久住山彙若しくは其山麓帯にあり或は由布山彙其他に連なる、然中ルリヒゴタイ、シヨン、ヤツシロサウ、ハナシノブは明かに満鮮由来の植物なるが、前者に広く、シヨンは久住山の四圍にヤツシロサウは久住山彙に、ハナシノブは続く地方にあり外輪山の地部にある、シムラニンジン、ホクチアザミ、シラヒゲサ

ウ、シコクフウロ、ルリイチゲ、東部にある、イブキトラノヲは久住山彙若しくは由布山麓まで産するものなり然中ホクチアザミは満鮮由来の植物にして関西地方に散点す。

久住山彙には阿蘇山に見ざる若干の分布上注意すべき植物ありエヒメアヤメ（由布山彙にも多し）イブキワニグチ（由来山彙もあり）サクラスミレ、タチスミレ、ブンゴバウフウ、レンリサウ、フキヤミツバ、クガイサウ一種、オホツルカメバサウ、コケモモ、ツクシサラサドウダン、オヒヨウニレ、エゾエノキ等是なり、エヒメアヤメ、オホツルカメバサウは明に満鮮系のものなり、本州中南部に産せずして此地にあり、或は特有と考ふるも可なり。

因にしろす阿蘇地帯以南の九州南郡山脈中にある植物の主なる要素は四國に連絡するものにして上記とは其由来を異にす。

此等を併せ考ふれど満鮮由来其他のものは中部火山地帯のものは久住山彙を中心として分布するを知るべく阿蘇山彙の植物は久住山彙をへて由来せしと断ずるも可べし。而して此等山地の植物中満鮮系のものは勿論、其他のものも四國高山になくして此地方にあり而も中国に連絡するもの多きより考ふれど中国經由の北系山地植物は四國經由のものに比して多きを知るべし。之を比較して其由来と生態を察すれど興味ある事實を發見すべし。

山林植物につきては外輪山の西北部鞍岳の溪谷、筑豊山脈に近きところには之に分布上の連絡を有する植物あり、ムクロジ、シシラン、クロタキカヅラ、アヲカヅラ、ハシリドコロ、ヤマホ、ヅキ、キバナチゴユリ、ヒメナベワリ、イハヤシダの如き南系分子を有するを珍とす、又ヲトコヨミナヘシの如き種類を生じたと奇とすべし、外輪山の西南部下部には九州南郡山脈に見る種々の分子を包蔵す、フツキサウ、ヤハズアチサキ、オホモミチガサを珍とす。

(293ページより)

鳥は2月12日より実施して居るに拘らず無処理鳥は4月14日で約2カ月遅れている。鳥の雛の囀りは処理鳥は8月下旬で無処理鳥は7月下旬までで後は換羽期に入り囀りを止めてしまった。

4. 結 論

以上に得た一部の結果から、次の如く要約することができる。

(1) 性ホルモンが洋鳥の産卵数及び回数を増加させ

る事が可能である。

- (2) 性ホルモンが受精率を上昇する作用をもっている。
- (3) 性ホルモンは産卵開始を早め産卵日数を持続させさせるとともに、卵巣の発達を促進せしめる。
- (4) 性ホルモンは雛の囀りの持続日数を保持させる作用をもっている、即ち発情期間の持続性作用をなす。